

# 私のシベリア抑留記

神崎辰雄

(會員 鶴見町大島)

終戦前、私は、当時関東州大連の中央電報局に、オペレーター(通信士)として勤務していた。

昭和二十年五月、関東軍最後の現役兵として新京(長春)近くの公主嶺機動第一聯隊(連)に入隊することになった。

通信隊に配属され、八十名の初年兵はモールス信号の初歩から訓練を受けることになったが、通信士の資格を持つ自分には訓練の苦労は全くなかった。

だがその反面、銃剣術・馬術・軍事教練でお返しがきた。さわったこともない軍馬の飼育、馬は新兵とみるとなめてかかる。蹴る、咬みつく、手がつけれられない、それを馴らすのに苦労した。

なんとか三ヶ月を経過したとき、突如ソ連は何の前触れもなく、八月九日未明、一方的に対日宣戦を布告し、

ソ満国境を突破し、圧倒的兵力をもって怒濤の如く、満州に攻め入った。この時、わが関東軍は南方に兵力を送り、空巢同然の戦力でしかなかった。

私達の部隊もすぐさま動員がかかり、国境へと出撃することになった。だがすでにトラックはなし、野営をしながらの行軍である。

腰には一〇発の実弾を着け、帯剣、背囊には食料、日用品、それに毛布をくくりつけ、三八式歩兵銃を肩に炎天下を行軍して行くのであるが、頭から水を浴びたような汗、脱水症状でバタバタ倒れる兵士も多く出たが、構っているひまがなかった。背囊枕に仮眠を取ると、夜の満州は雨が多い。濡れた毛布の重いこと。

やっと国境近くへやってきた。開拓団の人たちは、親子散り散りに離散して逃避した跡であろう。何処かに救いを求めるような声がする。

中隊長の訓辞がある。「明日はいよいよソ連軍に突入するぞ、みんなの命は俺に預けてくれ」、百二十名の部下は緊張のひとときだった。

行軍に疲れし休、横たえて、ソ満国境の星空を見る自分の命も今宵かぎりかと思うと、悲しさを忘れて遠

い星空をほうと見ながら、今まで生きてきた想い出が走馬燈のように交差した。

明くれば八月十五日、ふと受信機に異変が生じた。今から陛下の重大放送があるという。部隊は進攻をとめて、じつと受信機に耳をかたむける。

「ガーガー、朕はポツダム宣言を受諾し、ガーガー、朕は耐え難きを耐え万世のため……」停戦だ。もう進攻することはない、本部吉林(きちりん)に引返せ。通信隊にいたお蔭で命が助かった。

吉林ではソ軍師団長と、関東軍師団長の立合で武装解除が行なわれた。広い練兵場にずらりとならべられた兵器、多くの日本刀も没収されてしまった。

日露戦争で、敵将ステッセルと乃木將軍が停戦会見した旅順水師営の、なつめの木の繁る土民の民家が想い出された。(詳しくは史談一六六号・爾靈山参照)

戦争は終わったのだ。日本に帰れるぞ。誰の胸にもその希望は大きく膨らんでいたと思う。

だがその願いとはうらはらに、ソ連軍は我々を拉致してシベリアに送りこむことになったのである。

ダモイ(帰す)と言つて一度北滿に集結させ、何も分からぬ我々は、ウラジオストックから帰すのかと思つた。北滿は秋の訪れも早く、アカシヤの葉は黄色に色あせて、ヒユウヒユウと風に舞つていた。

貨物列車の中を二段にして、窓という窓は遮へいした列車につめこまれた。

誰がつけたか人間家畜列車輸送車と呼んだ。これで広い広野のシベリア鉄道を進んで行くのである。一日一食のスープと黒パン一片、ひもじさを通りこしている。

駅に着くと、パンをかかえた民間人が、物々交換にやつてくる。ジャポンスキー(日本兵)靴下、手袋はないかという。我々はひもじさに負けて、パンと交換して喰べる。すると歩哨はこれから寒くなるのだ。後で困るからやめると叱る。嚴冬の迫るのはもうすぐだ。

列車はハバロスクを過ぎ幾日かすぎて、バイカルの湖畔を横ぎって進む。まさに大湖、見えなくなるまで三日かかった。

二十日ばかりかけて着いたところは、アルタイ州ロピトフカと言う田園風景豊かな田舎町であった。その広大な土地に、工員二千人を使うスターリン工場があり、

戦時には戦車、平時はトラクターを作る工場だった。

翌日より早速、工場の各分野に分かれて仕事に着いたが、私の持場は鑄物工場で、鑄物の原型を作る砂作りだった。

工場の外からルーシヤンと呼ぶ二十八才になるマダムと二人で、畚に砂を入れて工場内の輪転機まで運ぶ。男のようなくましいルーシヤンは我にかまわず、畚いっぱい砂を入れる。少しへしてくれとたのんでも、鬼のルーシヤン、聞く耳をもたぬ。腹がへつては、力も出ない。

午後になるとルーシヤンはそつと市場へぬけ出して行く。砂がまに合わず、主任は怒鳴ってくる。一人でテコテコ舞いである。それが分かつているのかルーシヤンは帰りにパンを買ってきてくれ、そつと渡してくれた。ある夜、夜間作業をしていると、現地人が二、三人やってきた。「おいジャポンスキー、日本にもあのようなものがあるか」と煌々と照る月を指さした。私はすかさず、日本にはいくらでもあると答えたら、顔を見合わせてびっくりしている。ナンセンスだった。

収容所では逃亡兵はいないか、一日に一度点呼をとるのであるが、五列にならんだ捕虜(日本兵)の数を、一、

二、三、と数えて行く。途中で間違うと、また最初から数え直す。掛算ができないのにびっくりした。

ラーゲル(収容所)は鉄条網を張りめぐらして、四隅には望楼が建っていて、歩哨が自動小銃で監視していた。

厳冬の冬がやってきた。一日、三〇〇グラムの黒パンと飯合の蓋一ぱいのスूपで身がもつはずがない。兵士はバタバタと異国の土となってしまった。

収容所近くの雪の中に穴を掘り、五体も六体も一っしよに積んでリヤカーで運ぶのであるが、死体をくるんだ毛布は歩哨にはぎ取られ、素裸の遺体はすでに凍てつき、穴に入れると、「カーン」という音がして手も足も折れてしまう。聞くとところによれば、毛布は歩哨がウォッカと交換していたようだ。

工場外作業の兵士は凍傷にかかる者も多かった。十分な医療器具もなく、麻酔もなく、放置すれば指は腐ってしまう。麻酔なしで指を切断する軍医も辛かったと思う。

ソ連もドイツとの戦争に勝ったとはいえ、相当な物資不足であった。ノルマと言う鞭に追いまわされて、一働かざる者、喰うべからず」、女子も年頃になれば労働に

かり出される化粧をしている娘など一人もいない。

乗馬も得意で、裸馬でもかるくこなす。かの有名なコザック騎兵隊がしのばれた。

ある日、私はライオン歯磨の粉を工場に持って行き、休憩時間に女子工員の前で「ジャボン白粉」と言うと、女子工員がむらがつた。少しずつ配給してやると喜んで、お礼にパンをくれた。

工場から帰る頃はすでに夕暮れである。冬はバスも車も通じない。民間人の乗物は馬櫓だけである。

雪の広野をサニー(橇)に乗って 吹雪くシベリア雪の町

暮れる寺院の鐘の音淋し 馬よ急げよ灯りが見える  
ふるさとの夕餉の灯りが恋しい。望郷の涙にくれながら、腹一つばい喰べたい。収容所にとほとほ帰る皆の足取りは重かった。

二年後、いよいよダモイ(帰ること)になった。スターリン工場を発つ時、工場の窓から工員達が手を振って別れを惜しんでくれた。ルーシャンも「ジャボンに帰っても頑張って」と大きな手で握手をしてくれた。人と人との国境はない。

私達はこうして、またシベリア鉄道をナホトカ港にむけて旅をつづけたが、列車は相変らずの人間家畜列車でまわりの景色を楽しむ余裕もない。バイカル湖がまた見えてきた。すき間から見る湖面はすばらしく冷めたい景観だった。現地人の鮭を下げている姿も見えた。

ナホトカまでくると、復員兵で満員とのことで、トラックに乗せられ、ウラジオストク山中に輸送された。ここで伐採作業をすることになったが、かねてよりソ連の計画であったのだろう。三度目の冬、果して生きぬくことが出来るだろうか、皆の顔に不安がよぎった。

まだ見たこともない大木の聳える原始林、原住民が電動ノコギリで伐採した大木の枝を払い、同じ長さに切断してトラクターで山道まで引出す。大木は予測しなかつた方向にずれることもある。逃げ場を失えば、蟻のようにやせ細った我々を押しつぶすのは造作もないことだ。それに一番神経を使いながら、作業をつづけた。

夜は自分等で作った掘立小屋で一晩中、薪を燃やして暖を取り、またシベリア狼の襲撃をかわした。ここの松の木は松笠はすごく大きく、そのベンの間には落花生のような実がびっしりとつまっている。これを焼いて喰べ

ると美味で、脂肪を補った。山中で半年間、雪で顔を洗うだけで、体はそのまま、下着はシラミの巣となった。

十二月となり、ダモイ(帰る)だという。三度目の正直、本当なればよいが、原始林を後にナホトカに、船を待つこと二、三日、日章旗をひるがえして復員船山澄丸が入港、みんなの感激、タラップを踏む足取りもはじめてかるい。

山澄丸は日本海の荒波をけたてて一路舞鶴へ、「国破れて祖国あり」祖国の山容は緑に映えて傷心の我等を迎えてくれた。

今日も暮れ行く異国の丘に 友よつらかる切なから  
我慢だ待つる嵐が過ぎりや 帰る日も来る春もくる  
望郷の涙にくれながら、帰る日まで体力が持たず、シベリアの土となった戦友のことを思えば、今でも胸が痛む。戦後の私達の奴隷的生きざまを広く世間に知ってもらいたい。

亡き戦友の鎮魂譜として拙いこの一文を捧げます。

## 私の戦争体験記

### バツタと小便汁と号笛

林 寅 喜

(会員 佐伯市中の島町)

私は昭和二十年一月、横須賀海軍工作学校へ普通科練習生として入校した。というよりもさせられたと言った方が適切かも知れない。

それは当時旧木立村<sup>もと</sup>で十七、八歳から三十歳代の男性で軍隊か徴用に取られず、村に残っていた人は指を折って数える程しかいなかった。したがって、かくいう私も二十歳の徴兵検査を待たず、十八歳で海軍に志願(催促)させられたわけである。しかし、生来ひ弱であった私の検査結果は丙種であったから、まさか取られるなどとは思ってもいなかった。そうしたことから入校式の当日、担当した教班長達(下士官)は、丙種まで(外にもいた)入校してくると思ってもいなかったらしい。

因に徴兵検査の基準は甲種・第一乙種・第二乙種・丙